

I — 1 世界の中の日本の役割

ポール・ケネディ

本日、国際日本文化研究センターの国際研究集会にお招きいただき、講演することは私にとっては大きな名誉であり、梅原猛所長はじめ、日本の皆様方に対してお礼申し上げます。しかし感謝致しておりますとともに、私は少しばかりの心配も致しております。と申しますのも、ここにご出席の優れた学者、研究者の方々、聴衆の皆さんはすべて日本の言語、文化、社会、つまり日本そのものについてのエキスパートであります。ところが私はそうではありません。むしろその逆で、異なる国の間の国際比較を専門とする歴史家なのです。

この場にいらっしやる専門家の多くは、いわば日本という対象を内側から取り上げておられるわけです。つまり日本それ自体についての詳しい知識を長年にわたって培ってこられました。他方、私は知的な意味でも、また物理的にも十四時間半も空を飛んで、外から日本にやって来ているわけです。いずれにしても皆さんの方が日本についてお持ちの知識を持ち合わせておりません。そのために、日本で起っていること、日本文化、日本研究の在り方についてもしばしば誤解を犯すかも知れません。この点については前もってお詫びをしておかなければならないのです。

しかし日本を外から眺め、外から考察をするという点で日本研究の門外漢の見るところもそれなりの有用さがあると思います。ひとつには、世界の他の国の人々が日本をどう見ているか、ということの理解を深めてもらえるのではないかと思います。およそ百五十年前、スコットランドの詩人、ロバート・バーンスはその有名な詩の一節で

次のように言っています。

ああ、神がかの偉大なる才を我らに与えたもうたなら！

他者が我らを見るごとく、我ら自らを見ることのできたなら！

わたしはこのことは個人についてと同様、社会にも国家にも、また個々の文化についてもあてはまると思っています。

もうひとつ、私のような国際比較史家の見方がなんらかの有用性をもつ理由として、次のような点が上げられるのではないかと思えます。つまり、どの国を取り上げるにしても、それを外から見ることによって、ある国が特別である、ユニークであるというとき、一体それはどういう意味なのかということをはっきりさせることができるという点です。

『大国の興亡』という私の本をめぐってアメリカでは昨年まる一年間、論争が繰り返されましたが、その過程でアメリカの有名な右翼ナショナルリスト、ノーマン・ボドホレッツ氏が『ワシントン・ポスト』の論評記事の中で私の本を非難してこう言いました。「ケネディ教授はアメリカが世界史の中で特別な、ユニークな立場にあることを理解していない」と。その翌週、私は同紙に反論の機会を与えられました。その中で私はまず、勿論アメリカは特別な、ユニークな国であることを認めました。しかし同時に、インドもノルウェーもそして日本やニュージーランドも同じように特別でユニークな国なのだ、つまりどの国も特別であり、ユニークなのであることに注意を喚起しました。自分の国だけが特別でユニークだというのは、危

険なことです。そしてこのように言うときの真意は、自国が外の国よりも優れており、他の国は劣っている、ということなのです。そして、わたしは次のように言つて反論を終えました。「一体何が特別なのかはつきりさせずに、自分の国や自国の文化が特別でユニークだと人が言っているのを聞くとうんざりしてしまう」と。梅原所長は「自分の国や自国の文化を誇りに思つたとしても、傲慢になつてはならない」とおっしゃいました。私も全く同感です。

このような観点から国際比較史家の私でも日本と日本文化の研究にお役に立てるかもしれないと思つてはいるわけですが、日本について、つまり今日の私に与えられた演題である「世界における日本の役割」を論じる前に、皆さんがたに広く歴史について、あるいは人ほどのように歴史を理解するかについて、二つのアプローチがあるということをお考え頂くことにしましょう。

「線形的」と「サイクル的」

歴史の見方、あるいは見方の違いとして、ひとつは歴史を直線的に進むものと見る見方と、歴史は繰り返すと見る見方があるとおもいます。つまり歴史は真つづくにより高い段階へ進歩しつづけるものという、「線形的」と私が呼ぶ考え方が一方にあり、他方に歴史はひとつのパターンがやや違った形で繰り返されるものだという見方があるといえます。この「サイクル的」な見方によれば、歴史は一連の周期、あるいは出来事の繰返しであつて、決して直線の進路を描くものではないとするものです。

歴史が「線形的」だと見られるにはそれなりの理由があるとおもいます。つまり人間の生活にかかわる重要な領域で確かに一貫した進歩と考えられる流れがあるからです。たとえば世界の人口を考へてみると、それは何世紀にもわたつて一貫して常に増え続けて来ました。また世界の生活水準を見てみますと、むしろ現在まだかなり貧しい国も幾つかありますが、全体としてみると世界の生活水準の平均ラインというものは何世紀にもわたつて向上してきているわけです。

さらに技術の歴史に目を向けても、そこには直線的な進歩が見られるでしょう。きわめて原始的な農業、あるいは石器技術の段階から、銅や鉄の技術へ、そして造船や寺院建築、火薬の技術へと進み、ついには産業革命へ、そして今日のコンピュータの技術へと進んできました。それはすべて前へ前へと進む変化でした。またコミュニケーションの歴史を考えて下さい。かつて人間、あるいは人間らしきものが四つ足、つまり手と足を使って移動していたものが、立ち上がり、二本の足でより早く動けるようになり、馬を用い馬車が生まれました。そしてご存じのとおり、鉄道から自動車、ジェット機ついにはスペース・シャトルにまで進んで来ました。思想の歴史においても一貫した進歩、向上が見られるのではないかと思われ、人間の知識や理解、認識というものもこれまで何世紀にもわたつて向上してきています。

こうした歴史の見方は普通、物事はつねに進歩するものという考え方につながります。つまり歴史に対して楽観的な見方をもたらす

のです。例えば十九世紀のイギリスではそのような歴史の見方があり、「ホイッグ的」歴史解釈といわれます。それは人間の知識や理解、権利や自由は常に一貫して前進し、より良いものになって行くという見方だったのです。そのような意味でこの見方は進歩的かつ楽観的なものといえるでしょう。

他方、歴史には周期があり、何等かの点で歴史は繰り返す、といえるのではないかと人々が感じて来たことも理解できるのです。つまり、歴史とは本質的に人間と人間性にかかわるものであり、そして人間の本質は何世紀にもわたってそれほど変化してはいません。むしろ殆ど同じだと言っても良いかも知れません。人生には常に繰り返す周期のようなものがあります。シェイクスピアの劇の一つに『お気に召すまま』というのがありますが、そのなかで人間の一生が六つの時期に分けられて描かれています。幼年期、学童期、青年期、中年、老年へと進み、そしてまた、第二の幼年期に戻るといったものです。人間は何世紀にもわたって同じ愚行を繰り返してきました。戦争や侵略、あるいは政治の腐敗などです。私のイェール大学の同僚、マクマラン教授は最近『腐敗とローマの没落』という新しい本を出しました。実は三日前、私は成田空港に着いた際、インタビューを受けたのですが、真っ先にリクルート事件について聞かれました。つまり政治家と全持が一緒になって政治の腐敗をもたらしているという点についてです。私はこの問題については十分な知識をもち合わせていないので、ここでは意見を差し控えたいと思います。ただ、この点で人間は二十世紀になっても三世紀や四世紀か

らほとんど変わってはいないということを強く感じるのです。

別の例を考えることにしましょう。「中東」とか「中近東」と欧米では呼ばれる地域、つまりアラブ・イスラム世界ではジハード、すなわち聖戦への呼掛けが行われてきました。人間には宗教や人種にかかわる感情を暴発させる傾向があります。そのため歴史上多くのホロコースト（大虐殺）が繰り返されてきました。また我々は歴史上、偉大な国や帝国が興隆し衰退するのを見てきました。そうした興隆や衰退のありかたは多くの場合よく似たパターンを示しています。また、多くの王朝や王家が興隆し衰退して行ったのと同様に、大きな企業や会社が成長し、そして時とともに没落していきます。我々が人間の生の条件をテーマにした世界の古典文学に感銘を受けるのはこうしたことがかかわっているのかも知れません。日本の小説であれ、イギリスの叙事詩であれ、あるいはまたスウェーデンやアフリカのものであれ、そこには同じような繰り返される人間の生き方の共通したパターンが見られるように思います。だからこそ、黒沢明がシェイクスピアからあれほど多くのものを引き出して彼の映画の中に取り入れることができる訳です。このように考えてくると、我々が歴史から学ぶということがは僅かなものに過ぎず、そこには進歩といえるものはあまりなく、歴史は繰り返されることになる訳です。言うまでもなくこのような歴史の見方は人間の本性に対して保守的で悲観的な見方かもしれません。さきほど梅原所長はドイツとイギリスの二人の歴史家、オズワルド・シュペングラールとアーノルド・トインビーについて触れられましたが、この二人はいずれ

も文明の興隆と衰退について大きな歴史理論を構築した人です。そして彼らの理論はいずれも本質的に極めて保守的なイデオロギーになっていくのです。

私自身の考えとしては、いずれの見方も正しい見方だと思えます。つまり一方で歴史は「線形」になっていて、時代と共に進歩するものでありましょう。しかし他方、歴史はある点で循環的であり、繰り返すものだといえるでしょう。私は「一方でこう——他方で——」という言いかたは余り好きではありません。しかし歴史には、たしかに進歩の要素と繰返しの要素の両面があるのです。歴史のどの時代にもこの両面が見られます。二十世紀は十六世紀や十世紀とは異なっています。しかし人間の本性のゆえにやはり依然として異なる時代の間にも類似点が認められます。こうした点が歴史の見方として私がまず問題にしたいところです。

「歴史におけるユニークさ」

第二の点として、これに関連するのですが、それは世界史の中に見られる類似性や共通性とは別に、「歴史におけるユニークさ」という問題があげられます。我々はしばしば世界史の中で類似や共通性があることを当然のことと考えているような用語の使い方をしています。例えばローマ帝国による覇権の時代を「パックス・ローマーナ」と呼びますが、これを模して十九世紀のイギリスの覇権を指して「パックス・ブリタニカ」と言われるようになりました。そして第二時大戦後、再びそれを模して「パックス・アメリカーナ」

というスローガンが生まれました。そしてどの場合もその時代の歴史においてヘゲモニック（覇権的）な国が存在したことは共通しているわけです。その国はきわめて広い意味における戦略的な優越を享受し、また文化的な魅力も兼ね備えていました。一連の同盟国や衛星国、あるいは従属国や保護国を従えていました。またいずれも極めて明白な経済的優位や物質的基礎を備えていました。またいずれの場合も国民は「パックス・ローマーナ」や「パックス・ブリタニカ」、あるいは「パックス・アメリカーナ」ということを喜んで使っています。なぜならそのようなスローガンは自国が世界の秩序を作り出し、それを担っているということを明白に示すものであったからです。

しかしこうした類似にもかかわらず、いずれの場合も彼らは自分達の社会が世界史の中で他の例とは違って、ユニークな存在であると考えていたのです。彼らは自分達がそれまでの覇権国とは異なる優れた特性をもっているのだと感じていました。ヴィクトリア朝中期、あるいはヴィクトリア朝後期のイギリス人は「パックス・ローマーナ」を意識して「パックス・ブリタニカ」という言葉を使ったわけですが、彼らは常に「パックス・ブリタニカ」の方がより人道的に進んだものであり、より優れており、遥かによく整ったものだと思っていたのです。そして二十世紀初頭、大英帝国の「終わりの始まり」が到来したとき、愛国者も政治家も、また知識人もすべて今やローマ帝国が衰退した時と同様の、崩壊へ向かう道が始まろうとしているという見方に強く反発したのです。

現在アメリカにおいて、二十世紀後半アメリカは十九世紀のイギリスと異なっているか、ということを示そうとする大掛かりな知的な試みがなされています。これは極めてよく理解できることなのです。歴史はユニークさに満ちているのですからこうした試みは決して間違つてはいないのです。しかし他方、歴史には類似した出来事があり、共通の進行過程といえるものがあるのです。

別の例として成功した海洋貿易国家の例を上げることができると思います。日本の学者の中には、「今日の日本のあり方は世界史のどの国とも違った独自のものである」という人がいます。この言葉に對して私はいやでも、「一方では正しいが、しかし他方では……」という答え方をしなくてはなりません。そしてこのように言う日本人に對して、例えば小国ながら途方もない成功を取めた海洋貿易国家であつた十三世紀から十五世紀までのベニスの例を取り上げてみたいと思ふのです。それは外敵の侵入に備えてヨーロッパ大陸の周縁部、アドリア海の一角に位置して産業・貿易大国となり、二世紀以上になつてヨーロッパと中近東の經濟覇権を握り続けました。

また日本の学者は二百年にわたつて素晴らしい成功を取つてきた海洋貿易国家であるポルトガルの歴史について余り詳しく知つていないように思います。さらに今日オランダと呼ばれている、ネーデルラント共和国の十六世紀から十八世紀にわたる歴史を考へてみる必要もあるのではないのでしょうか。この間のオランダはきわめて小さい領土しかもたなかつたにもかかわらず、世界最大の工業、貿易、金融大国としての地位を保持しました。

こうした海洋貿易国家はいずれもきわめて小さな領土しか持たず、海洋に、つまり海を通じた貿易にすべてを依存しており、国民の生活を支える物資を自国だけでまかなうことは全く不可能な国だったので。それゆゑ、これらの国々は物資の交換、つまり貿易と金融に決定的に特化することにしたので。これらの国はすべて、ランド・パワー、つまり陸軍力において劣つており、その内陸側の国境はつねにその戰略的「アキレス腱」だったので。

それにもかかわらず、これらの国々は大変豊かになりました。それゆゑまた、周りのより貧しい、より大きな国から恨みを買うことになりました。しかしこうした共通性にもかかわらず、これらの国々は互いに大変異なつていたことも確かです。まず言語が大変異なつています。また例えば、オランダ人がポルトガルに行けばすぐにおかつてしまひます。国家体制や文化、芸術においても著しい違いがありました。さらにそれぞれ違つた時代にその国力の頂点を經驗しており、世界史に及ぼしたインパクトにおいても異なつています。

このように歴史の歩みには人類が絶えず發展を続けて行く線形的な歩みと、歴史の傾向として繰返しを經驗する循環的な歩みがあるわけですが、今日の日本はいずれのパターンにおいて見るべきでしょうか。今日の日本をこの歴史における共通性と独自性の組合せの中でどのように評価すべきなのでしょう。私も日本がその言語、歴史、習慣、社会規範など、文化的にユニークなものをもつていてことを認めます。また古い伝統をもつ民族であることも間違ひありません。それはスコットランドやポーランド、フィンランドなどと

同じです。つまりカナダなどとは違って、連綿たる過去を背負っている国です。カナダもそれなりに世界史の研究者には興味のある国ですが、フィンランド人やポーランド人、日本人などとは違ってそのルーツが遙か昔にさかのぼるといふ点でのユニークさはもっていません。つまり極めて洗練された独特の言語と歴史、社会習慣をもつという点で日本は確かにユニークなのです。

はるかに深刻な挑戦

こうした日本文化の内面的な特質について論じるのは私の仕事ではなく、ここにお集まりの専門家にお任せしなければなりません。私が話そうとしているのは世界史の研究において取り上げようとする国を、いわば外から見た場合の評価や問題点の指摘に限られる訳です。比較世界史家として外から日本を見たとき、日本は歴史家にとって特別に興味深い多くの特質をもっています。言うまでもなく、日本は近代化と工業化を成し遂げた最初のアジア、あるいは最初の非西洋国家です。しかもそれを驚くほど早期に成し遂げました。十九世紀末の西欧帝国主義が最も勢いの強かった時期に近代海軍を建設し、近代工業を興しました。アフリカから太平洋にわたって多くの非西洋社会がヨーロッパの帝国主義に侵略されて行ったときに、日本はこうした近代化を達成したのです。つまり歴史の流れに抗して近代化と工業化に成功したのです。国際関係の歴史においても、日露戦争から第一次世界大戦、そして戦間期にかけて日本の立場は独特なものでした。一九二一年から二二年に開かれた「ワシントン

海軍軍縮会議」と呼ばれる大きな国際会議は軍備の制限を約束するだけではなく、中国の東アジアの現状に関する基本的取決めを行いました。この一九二一年、他の非ヨーロッパ世界の大半は西欧帝国主義の支配下にあったのですが、日本は海軍の主力艦の規模を交渉するために代表を派遣するという地位にあったのです。今日、西欧では日本の高度な近代化や工業化、そしてそれによって日本が西欧諸国と互角に競争するようになったことをかたがた新しい出来事と見て、それを一九六〇年あるいは六五年ぐらいに始まるものとする向きもありますが、それには何十年にもわたる前史があったのです。このような日本の立場は西洋にする一つの挑戦であったし、西洋人の傲慢さと人種的偏見に対する挑戦であったのです。そしてある意味で、現代においてもそれはとりわけ恐るべき挑戦となっているのです。日本は今や東アジア諸国にとって経済と社会の近代化における世界的モデルとなっています。いわゆる「雁行理論」のいうように、日本を先頭に韓国、台湾、シンガポール、タイなどが雁のように列をなして現代化へ向け飛び続けているのです。これらの国は日本を何等かの意味でモデルと見なしており、このことは世界史における日本の重要な貢献になっているのです。

経済および技術の面では日本はもはや西欧に追いつき、多くの点で追い越しました。ご存じの通り世界金融の中心は六百年前ベニスなどのイタリアの諸都市にあったのが北へ移動し、ベルギーのアントワープからオランダのアムステルダムへ移りました。その後、ロンドンが世界の金融の中心となり、二十世紀、第一次大戦後ニュー

ヨーロッパへと移りました。それが最近十年の間に東京に移りつつあるのです。

ハイテクの分野においても日本はもはや西欧の後を追ってはおりません。極めて多くの分野で西欧諸国と競争し勝利しています。最近発表されたアメリカ国防総省の防衛技術に関する報告書によれば、戦略的に重要な二十二の工業技術の中で日本が多くの領域でアメリカをリードしており、大半の領域でアメリカに追いつき追い越しつつあるとされています。このことは今アメリカで大きな驚きと懸念を巻き起こしており、アメリカにおけるあらゆる議論において「日本」が焦点となりつつあります。昨年私の著書、『大國の興亡』が巻き起こした論争のおかげで、私は数えきれないほど多くの会議やシンポジウムに招かれ議会やシンクタンク、CIAなどの人々と話す機会がありました。そのような場合、当然話題は世界におけるアメリカの地位についての議論がテーマなのですが、最後に行き着くのはいつも「日本」なのです。あるとき、CIAの会議が終わったあと、私の前を歩いていたCIA幹部が同僚に「今日の会議は世界におけるアメリカの将来についてだと思っていたが、やっぱり後半はすべて日本についての議論になったね」と話しているのを聞きました。

アメリカの日本に対する脅威の念は純然たる経済や技術の競争力にのみにかかわるものではないのです。アメリカの市場で日本が占めている自動車のシェアとかアメリカの不動産や会社を日本の資本が買い占めているということなどないことではないのです。は

やい話が、イギリスやオランダのほうが日本よりも多くのアメリカの不動産や会社を所有しているのですから。アメリカ人の日本にたいする恐れは、私が思いますに、日本の競争力の強さが、アメリカの文化、習慣、社会生活、家族観念にかかわるアメリカの信念に對立する根本的な挑戦を意味すると受け止められていることのあらわれのようにみえます。このようなとらえかたからアメリカの鋭敏なジャーナリスト、デヴィッド・ハルバースタムは最近『パレード』誌で大きな論争を起した論文を書きましたが、その中で彼は、今や日本はアメリカにとってかつてのソ連の軍事的挑戦に比べはるかに深刻な挑戦であると言っています。実際、アメリカ人にとって「悪の帝國」とやり合う方がはるかに容易だということが分かっています。それには軍事予算を増やしさえすればいいわけですから。

ところが今や、社会全体の生産効率を国際的に比較するなどという問題に直面し始め、アメリカ人ははるかに困難を感じているのです。例えば教育の制度やレヴェルの日米比較、あるいは日本とアメリカの熟練労働者の平均的な知識水準、数学や幾何の素養、青写真を読み取る能力などが問題となっています。日本の高校二年生の上位五〇パーセントの数学能力に達しているアメリカの大学生は全体の一・二パーセントに過ぎないのです。アメリカ人はこうしたことを聞くと驚きとともに強い不安に駆られるのです。そしてこの不安の中にはこうした不均衡が生じた理由について自分達自身、何となく思い当たる節があるので一層不安が高まるのです。

ここでちょっと学校制度について見ておきますと、日本の学校は

アメリカに比べ遙かに集中的なやり方をとっています。それは到底、楽しいものとは言えないのですが、ともかく日本では集中的な授業がなされています。日本の子供達は一年のうち二百四十日から二百四十五日学校に行きます。アメリカでは百八十日に過ぎません。この六十日の差は大きく、いろんなことが教育出来ます。おまけに日本の学校はアメリカのように午後二時五十分で終わるわけではありません。日本ではその時間以後は主婦が学校にとって代わります。それゆえ、アメリカ人の日本に対する驚きの根底には、なにか女性の特別な役割があるのではないか、といった疑問や、もし学校が百八十日から二百四十日に増やされることになればアメリカのレジャー産業はどのような打撃を被るだろうか、という不安なども混在しているのです。しかし私はこうしたことがすべて全くユニークな挑戦であるとは思わないのです。

私が思いますに、このような教育や生活規範などにかかわる日本社会の特質は韓国や台湾、シンガポールなど東アジアに広く見られるものです。たとえば教育に対する家庭のとりわけ強い関わりなどは共通して見られます。

ここで私が思い起こすのは、今世紀初頭のイギリス人が、深刻な経済的挑戦者としてのドイツに対して抱いた恐れと驚きの念です。

ドイツの学校制度や社会システム、ドイツの規律やドイツ技術の正確さなどが驚嘆と不安の的となりました。この不安は、「我々は学校制度や家庭生活、技術の在り方そのもの、価値観自体を変えなければ競争できなくなっている」という感じ方によって一層深刻な懸念

に発展しました。

すべての国は、神に直結している。

さて歴史家としてわたしがここで言いたいことは、日本の世界における役割は一方で日本のユニークさや特殊性がもたらす問題を解決することであり、他方で日本が他の国と共有している類似性を理解し、より広い世界史のパターンの中に日本自身を組み込んで行くことでありましょう。従って私が「日本は特殊である」と言ったとしても、それは梅原教授が言われたように、「日本はユニークであり、また、そのことに誇りをもって良いが、それゆえに傲慢になることは決してあってはならない、ということを行っているのだと受け取っていただけなのです。なぜなら日本文化や日本の社会がもっている多くの優れた特質は、たとえ異なった組合せであっても、他の国々でも広く共有されているのですから。

歴史家として私が日本の独自性を云々するのはあくまで、日本の地理的・時間的な存在としての独自性であり、これはすべての国について当てはまる歴史的な思考の仕方なのです。ドイツの偉大な歴史家、レオポルド・フォン・ランケは「歴史上のすべての社会、すべての個人、すべての出来事はいずれも神に直結するものとして、神とのかかわりにおいて独自なもの」と言っています。ランケのいわんとするところは、歴史のあらゆる出来事、あらゆる国々、あらゆる戦争、あらゆる決定というものは、何らかの意味で繰返してある。つまり、それは何か前に起こったことの結果であり、また、そ

の後に起こったことの原因となっている、しかしそれらはすべてそれ自体、独自のものなのである、ということですが。つまりランケは時間と空間を異にするものはすべて、たとえ過去のある出来事の結果であったとしても、究極的にはそれ自体、独自のものだ、ということを行っています。

今日、日本は世界的に見て、たしかに大変独自の位置にあります。偉大な経済的成功を成し遂げています、しかし、同時に、将来に関して問題と不安を感じています。日本は今、人口の老齢化という問題に直面していますし、今後広がっていく享樂的な消費傾向に懸念を示す人もいます。また東アジアの新興工業諸国からの競争に不安を感じる向きもあります。しかし私は個人的には、日本はこうした挑戦にいずれもうまく対処できる能力をもっていると思います。私は日本が最も大きな困難に直面するのは、戦略と外交の領域だと思っています。今後、日本はアメリカとの関係をどのように進めてゆこうとするのか。特に今アメリカでは、ソ連との軍事的対立よりも日本との経済的対決の方がずっと深刻だという考えがはじまっていることを考えれば、このことの難しさは決定的といえるでしょう。また、ソ連との関係はどうするのでしょうか。もしソ連の体制が崩壊したら、あるいは、もしソ連が経済の再生に失敗したら、どうするのか。更に、次の十―二十年間に経済、軍事の両面にわたって力を急増する中国の膨張にどのように対処したらよいのか。

こうした問題で日本はこれまでの経済問題とは比べものにならない大きな困難に直面してゆくでしょう。これらの国際関係が今後ど

のように推移するかを論じるのは歴史家としての私の能力を越えているでしょう。例えば、アメリカとの関係は比較的うまくいくが、中国との関係は大変難しくなるだろう、などという予測もありうるでしょうが、私には全く見当もつきません。また実際、ほかの誰にもわからないでしょう。しかし私が言いたいことはただひとつ、日本がこうした国際的な挑戦に対処し世界における日本の役割を果たして行くうえで不可欠なことは、これまで述べてきたような長い歴史の中から得られる教訓をつねに肝に銘じて歩むということでしょう。また、日本文化それ自体について深い学問的理解を図るよりも、他の国々、他の社会のもつ文化や生活態度、思考様式などを理解することが一層大切だと思います。世界史の中で日本がユニークであり、特別な存在であることに関心を向けるのではなく、他の多くの国や社会も自らが世界史の中でユニークであり特別な存在だと考えていることを常に念頭に置くことが大切だと思います。

初めに紹介した詩人、ロバート・バーンズが、他人が自分をどのように見ているかを知る能力を自らに与えるよう神に祈る詩の一節を常に心にとどめることが大切でしょう。自らの文化に深い愛着をもつとともに、他の文化への敬愛の念を失わないならば、日本は二十一世紀に向かって確かな未来を約束されるでしょう。最後に、梅原所長の言葉を敷衍して、「われわれは自らの独自性を認識して二十一世紀に向かって自信をもって進まねばならない。しかし同時にわれわれは傲慢であってはならない。何故なら、われわれの他にも世界には独自の文化、独自の国々があるからであり、ランケの言うよ

うにすべての国とすべての個人は「神に直結している」から」とい
う言葉をここでもう一度繰り返して、私の話を終わりたいと思いま
す。ご清聴ありがとうございました。

(中西輝政 訳)